

## ことばと人間

— 四つのアフォリズムを巡って

学問への招待、これが本誌の総タイトルである。と聞く。そして私は本学の一英語教師としてそれに参画することを求められた。要するに、一学科目としての英語を、学問として位置づけ、それがいかなる学問であるかを説明ないし紹介し、諸兄をその世界へ招き入れることを求められている。

ここでさまざまな疑問が起る。わざわざお招きに与らざるとも、英語はすでに中学、高校と嫌になるほどつき合ってきたではないか。学問としての英語？ 私は大学で英語学や言語学を専攻するつもりはない、という人も多勢いよう。ともに尤もな発言である。

では、英語は単なる実用手段に過ぎぬのだろうか。学

## 磯地明雄

校で学ぶ英語は全く学問と無縁なのだろうか。英語を、あるいは、広く外国語を、学ぶことの意味は一体何なのか。

今日、外国語教育に対する批判、論議は世に喧しい。通俗的ないし啓蒙的「ことば」論、学問的な研究論文、ともに巷間にあふれている。ここでそれらを紹介、批判する余裕はない。以下、本稿の表題のとおり、幾つかのアフォリズムを巡りつつ、外国語教育にまつわる私の問題意識を述べたい。そのなかから、さきの問い、つまり、外国語教育の目的と意味、そして、もしありうるならば、語学なるものの学的位置づけの可能性、が浮び上ってくれば幸いである。

一 経験とことば

本誌が主に新入生に向けられていることに鑑み、最初に紹介するアフォリズムとして、次の文を読みたい。

The child sees everything which has to be experienced and learned as a doorway. So does the adult. But what to the child is an entrance is to the adult only a passage. (Nietzsche)

説明するまでもなく、ひとつの新たな経験、新たな学びの世界へ入るとき、子供と大人の姿勢の違いを捉えた文である。(大学という所も、新入生にとって、ひとつの新たな経験の場であり、学びの場である。単なる「通過点」でなければ幸いである。)

子供にとっては、新たな経験、新たな知識との出会いは、その一つひとつがすべて未知の世界への「入り口」である、という。今、語学云々の以前に、子供の言語習得に目を向けてみよう。そこには、コトバを介して新たな経験世界へと入ってゆく子供の姿が鮮かにみられるだ

ろう。

幼児の発語行為の特徴として誰しもの気がつくことに次のような事実がある。

幼児はその成長のある段階で、目にふれるもの、耳に聞こえるものに対して、しきりにその名を言う。習い覚えたモノの名を繰り返すことにより、ある特定の対象に対してある特定のコトバを与えうる、ということを知り、同時に、その自らの発語行為に対して周囲の人々の示す反応を喜ぶ。

少し進んだ段階では、これも周知の如く、「これなあに」「あれなあに」を連発する。更には、「なぜ」「どうして」を連発する。前者はモノとコトバの対応確認であり、後者の問いが向けられているのは、コトの世界である。

もう一点忘れてならぬのは、今述べたことと裏返しの関係になるが、逆に、名を知りえぬとき、あるいは、「なぜ・どうして」に対する答を得られぬときの幼児の不満・不安である。おとなにとっては新しい経験の戸口 (doorway) はそれこそ単なる 'passage' にすぎぬかも知れないが、子供にとっては、それは 'entrance' であ

り、その向う側に開けるのは悦びの世界であると同時に不安に充ちた世界でもありうる。そして、この不安が、子供の自己認識、世界認識の大きなモメントとなる。

幼児はコトバの獲得を通してモノ・コトの世界へ参入し、突き進む。言い換えれば、モノ・コトの世界はコトバにより成就する、と言っても過言ではない。

また、幼児はその発語行為を通じて、つまりコトバを媒体として、自己と他者との間に連関の場が生れることを知る。

さらに、子供はコトバにより自己の世界を拡げてゆくと同時に、コトバにより、周囲の世界の中の自己の存在を確認してゆく。先にもふれた、ある特定のモノあるいはコトに対してある特定のコトバを与えるということは、それにより、茫漠たる世界の一部を、コトバを介して、切りとることを意味する。この対象認識は、同時に、その行為者たる主体の相対的な位置づけ、あるいは、自己の存在定位につながるのである。(判りやすい例を引くならば、道に迷ったとき、人は周囲の事物を確認することにより自分の位置を知る。この場合にも「不安」が

主要な役割を果たす。不安が無ければ人は誤った方向を平気で進むということもありうる。)

このようにみて来るとき、コトバの獲得は、幼児にとり、文字どおり新たな世界・学びの世界へと突き進むことを意味し、同時に、自己と他者、自己とそれを取りまく世界、との関係を築いてゆくことを意味する。

幼児を表わす英語の 'infant' は「ものを言えない者」を原義とする。コトバの獲得は、一個の生物がヒトとして確立してゆくことを意味する。

さて、こちらで大人の方へ視点を移そう。

子供の言表行為をめぐりわれわれの観察してきた諸点は、広く大人をも含め、コトバというものを考える上で、さらに、広く言語教育を考える上で、基本的な重要事項を含んでいる。いや、人間の言語行為の基本はその大部分がこの幼児の発語行為に既に現れている、と言ってもよい。

その第一点。言語のもつ最も重要な働きのひとつは、ヒトはコトバにより世界を分節 (articulate) する、ということである。

ヒトはその成長段階のそれぞれに応じて、そのときに合ったコトバを獲得しながら自己の世界を拡げてゆく。青年期は、大人の感情世界、あるいは、歴史や社会、あるいは、抽象論理の世界、等々へ入る鍵となるコトバを、恐らく、もっとも吸収する時期だろう。逆に言えば、それら自ら吸収するコトバによって自己の世界を形成してゆく。それらのコトバにより、流れ動いてやまぬ混沌たる経験世界にひとつの秩序を与える。

コトバによる世界の分節ということは、また、ある特定言語によるある特定の世界の分節となって表われる。試みに、ごく日常的な語彙をとり上げて日本語と英語の比較をしてみるとよい。例えば、色や味覚を表わす語、人称代名詞、身近な動植物の呼称、それぞれに日本語と英語とではそれにより切りとられる世界が大きく異なるとが判るだろう。

因みに、今、本稿で私の使っている「コトバ」という語、これはまぎれもなく日本語であり、英語で言う word (個々の単語)、speech (言表行為)、language (音声・文字により思想・感情などを伝える、あるいは、形成する、言葉の総体。また、一国ないし一民族の言語)

等々を含めて、便宜的に使っている。裏返して、英語の word, speech, language それぞれ、即「コトバ」ではない。それぞれに切りとる対象の拡がり、質は異なる。

これは単語レベルに留まらず、文の構造、比喩表現、等々にも及ぶ。

かくみて来るとき、人それぞれの世界は、人それぞれのもつコトバにより規定され、限定される、と言ってもよい。「各人にとっての言語の限界は世界の限界を意味する」(ヴィトゲンシュタイン)のである。

コトバのもつ働きの第二点。それは右と関連することだが、先にも触れたとおり、人はコトバにより対象認識を行うと同時に、この対象認識が自己認識にはね返ってくる、という点である。

コトバを求めて、かつ、それを得られぬときの幼児の不安はその萌芽的な表われである。青年期に特徴的な強い自意識、自己反省、あるいは、強い理想主義、更には又、その裏返しとも言うべき漠然たる不安、等々もここに起因する。

つまり、コトバ獲得による、あるいは、言語使用によ

る自己認識とは、ヒトがその成長過程に依じて、コトバを媒介として自己と外界との相対的な位置関係を確認し、自己の定位を計る試みである。

生物界には時間・空間内での自己の定位づけを行って  
いる様々の事例がみられる。(尤もここでいう時空概念は人間のそれであり、他の生物の時空世界は、厳密には、人間には判らぬだろう。又、「世界」というものも、人間が、あるいは、個々人が知覚し、認識しうる範囲の時空の拡がりを指すのであり、人間以外の生物にこれを適用するのは、これまた言語的制約から来る便法にすぎない。)例えば、数々の渡り鳥が、人間尺度からすればとてもつもない空間を移動するに際して、かれらは太陽や星々の位置、角度、等々を利用して自らの定位手段とするという。

ヒトにあっては、コトバこそがこの自己定位の手段なのである。

ヒトがコトバを媒体として外界のモノ・コトの世界へと進みゆくことは既に述べた。その際に、人間の知覚作用とそれに基づく認識作用も又その大部分をコトバにより行う。何らかの言語以前の知覚作用があっても、それ

を表わすコトバを持たぬとき、その知覚は意識に上らない。(英語の *sense, make sense, make sense of* という語句、表現はこの間の事情を反映していて興味深い。)

更に又、ヒトはコトバを通して非現実、非実在の世界をも経験する。いわゆる想像力の世界、高度の抽象世界——例えば、空(虚無)の認識、ゼロ、無限等々の観念——を有するのは人間の特徴と言ってよいだろう。

これらの観点に立つとき、他者の言葉、他国の言語を知ることの意味はもはや明瞭であろう。それらを通して人は自己の世界を広げるのみならず、同時にそれは、自己の言語、自国語により規定されている自己の世界を相対化し、対象化することをも意味する。

人間は外に向って開かれた存在である。自己から他者へ、自己から世界へ、人間から人間以外の世界へ、等々さまざまな意味で開かれた存在である。その「開かれて在る」ことの基盤を成すのは「コトバ」である。

## 二 応答と責任

外に向って開かれた存在というのは人間のみに限らない。先に例に出した渡り鳥はもちろん、一本の草木と言えども、遠く一億五千万キロかなたに源を発する太陽の光と、あるいは大地の奥深く、無数の無機物、有機物の世界とつながっている。生物としてのヒトもその意味では例外ではない。ただ、人間にあっては自らのそのようなあり方と同時に、他者の存在様態をも視野に入れ、それに応え、それに働きかける。

前章ではわれわれをとりまく世界、そして自己の経験世界への「入り口」としての言語の働きをみてきた。本章では、自己と外界とをつなぎ、自己と他者とを媒介し、自己内部での思考・感情を形成するものとしてのコトバの働きを問題とする。

又ひとつのアフォーリズムを紹介し、それを巡って話を進めたい。

Genuine responsibility exists only where there is  
real responding. (Buber)

言うまでもなく、こゝでは responsibility と responding との対応が眼目である。(もしもこれを日本語の「責任」と「応答」に置き換えるならば両者の対応・連関は希薄にならざるをえない。ただ、日本語で「責任」という重要概念を使うとき、あるいは、考えるとき、それが responding ということと密接に響き合っていることは、いま一度注意を促してよいだろう。ドイツ語の Verantwortung—antworten は、よりはっきりと対応している。)

何に対する responding か。そこに生起する responsibility とは何か。

見る・聞く・感ずる・思う・考える・意欲する——およそ人間の内面活動はすべて言語との結びつきの上に成り立っている。見る・聞くという一見受動的な行為なし知覚作用も例外ではない。

今ひとりの男が野原の小道を歩いて行く。彼の眼にふれ、耳に聞こえてくる物は無数にある。だが、囲りの草木、足もとの石ころ、鳥の声、虫の音、すべてそれぞれ

の個有の名を以て呼びかけうる訳ではない。このとき、名を知らぬものは、彼にとっては存在せぬに等しい。また個々の事象の連関を捉える言語操作の及ばぬ部分はその意識に入らない。コトバにより分節されぬ世界は彼にとっては無に等しい。

しかし、もしも彼が注意ぶかく外界に対して心を開き、充分に感覚を働かせるならば、数々の草木が眼につき、さまざまの音が聞こえてくるだろう。形を形として捉え、音を音として捉えるというまだ大まかな分節とは言えそれが起っている。更に意識を集中すれば、この形の世界の、音の世界の、より再分化されたボタンが彼の意識の中に生れるだろう。

これが *responding* に他ならない。外界からの刺激に對する単なる「反応」にすぎぬではないかと言われそうだがそうではない。個々の形、個々の音に對してそれを受けとめようとするとき、彼はそれらの事物と自己との間の関係の場に入りつつある。

この先かれがどのような態度に出るか。もしもこの関係がそこで終ってしまうならば、あるいは、彼がそれを放棄するならば、そこには何も起らない。何の状況も生

れない。だが一方で、もしも彼がこの関係をさらに深め、強めてゆくならば、そこに生れる状況は単なる「刺激・反応」の関係ではない。彼に語りかけているものは、漠然たる、分節化以前の自然の一部ではなく、個の存在であり、彼もまた一個の人格として「応答」している。これが先のアフォーリズムに言う '*real responding*' であろう。(「人格」の意味は後の補註2を参照。)

このような状況のなかへと歩み入る彼は、放棄、断念、無視とは反対に、この状況に對して主体的に *responsibility* を引きうけたことになる。

右の状況にみてとれるとおり、「責任」は行為の自由な意志決定に基く。責任がふりかかる、というときの責任は眞の責任ではない。責任を負うとは、ある状況の中へと主体的に入りこむことを意味し、その状況にコミットするかしんないかは主体者の自由な意志決定に基く。場合によってはコミットするのを拒否するのも又責任のひとつのあり方である。つまり、責任と自由とは対立概念ではなく、逆に、相補的な概念である。そして両者ともはその核を成すのは人格である。

ではこの状況への参入 (*responding, commitment*) と

責任 (responsibility, commitment) は何を媒体として行われるのか。それは言語である。人間にとって、実在世界への入り口は言語であり、同時に、実在世界との関係状況は言語においてのみ成立する。

この関係状況においてもう一点われわれの注意をひくのは、そこに含まれる時間的要素である。「応答」は瞬時に始まり、時間の経過の中で深まる。瞬時に對して応答し、責任を担い、その持続が眞の現実的応答となり、眞の責任となる。そこでの時の流れは、内的な生きられ、時間であり、単に物理的な時間ではない。

言うまでもなく、この応答、関係状況の成立、そしてその中で責任を身に引き受けること、これらは人間と自然界の事物との間でのみ起ることではない。対人間、対社会、対異文化、あるいは、対芸術、対自己、等々もろもろの事象において絶えず繰り広げられる。

だが、それらが「眞の応答」、現実態となつて顕われる応答、「眞の責任」となることがいかに困難であるかは現今の諸々の人間関係、社会情勢、環境問題、等々に

みられるとおりである。

その困難の原因は複雑多岐にわたるが、今われわれの課題に沿つて考えるとき、そのひとつは、つきつめるならば、今日の社会におけるコトバの貧困化にある。いまひとつは時間の質的变化、生きられる時間の貧困化ないし稀薄化にある。

コトバ、時間、ともにへ応答・関係状況・責任の構成要素であり基盤であることをわれわれはみて来たが、一方の貧困化、稀薄化は他方のそれを生む。

現代は情報化社会の時代であるという。何を伝えるのか、何を受けとるのか、を問わねばならぬだろう。

今日の情報伝達の一大メディアたるテレビ、ラジオ等々は、その情報源としての価値、力は認めなければならぬが、一方で、これらはその視聴者に対して即時的、即物的レスポンスを否応なしに迫る。その方向性において一方通行であり、物理的時間に制約され、かつ、時間の積み重ねからなるテレビ、ラジオの世界では、内的時間、生きられる時間の上に成り立つ 'real responding' と 'genuine responsibility' の育つ余裕はない。コトバは、関係状況を生み出し、同時に、それを構成する媒体

(メディア)となるが、テレビ、ラジオ等のメディアはまさしくそれと逆方向の働きをもする。

また、モノとの係わりが、その生産工程においても、消費者の側においても、自らの主体的な応答・責任をほぼ完全に離れた状況で展開する今日の商品経済機構は、人間存在の基盤である、自己とモノ・コト・ヒトとの間に成立する〈関係状況〉を稀薄化し、そのことが更に諸々の環境問題をひき起すのみならず、人間みずからの質的な貧困化を招くことにつながってゆく。

一本の草木からのわれわれへの語りかけ、そして、これへのわれわれの応答・責任、職人の手仕事における、モノからの語りかけとそれに対する応答・責任、地球上のどこかに住む人々から、あるいは、生きものたちから発される呻き声への応答・責任、これらはすべて連続している。

さて、話がいささか抽象的になり、又、広範囲にわたったが、筆者の念頭には、本稿の出発点である外国語教育の意味を問うというテーマは一貫して流れている。右の考察がすべてそこに係わってくる。外国語を学ぶということは、あるいは、テキストを「読む」ということは、

今までみてきた、対人間、対社会、対自然、対芸術、そして忘れてならぬものとして、対自己、等々もろもろの場面における主体的な応答・責任の具体的な演習の場がそこにある、ということである。

教室で教師が学生に向って「テキストをよく読め」とか「自分の言葉に責任を持て」というとき、それは、テキストの文言に——つまりはそこに出現するモノ・コトの世界に、著者の、あるいは登場人物の思想・感情に——しかと respond せよ、そして responsibility をもって自らの言葉で語れ、ということである。言葉の先ただ情報のみを求めるのは真の「読み」ではない。テキストを単なるひとつの 'passage' にするのではなく、ひとつの 'entrance' としなければならぬ。

### 三 「生きる」ことと「知る」こと

次のアフォーリズムへ移ろう。

We live less and less and learn more and more.  
I have seen a man laughed at for examining a  
dead leaf attentively and with pleasure. No one

would have laughed to hear a string of botanical terms muttered over it. (Gourmont)

一枚の枯れ葉を注意ぶかく、悦びをもって調べている男、かれはまさしく 'real responding' をしている男だろ。最初にみた、新たな経験の戸口に立ち、それを通過点としてではなく、入り口としてみる子供の延長線上にいる。

一方、この男を嗤う囲りの人たち、そしてもしもこの男が枯れ葉の上にかがみ込んで頻りにぶつぶつと植物学用語をつぶやいたりすれば、恐らく嗤うどころか反対に感心し、賞讃のまなざしを向けたであろう人たち、これは現代人の姿である。

ここに描かれているのは、まさにその文頭に言うところ、「生きる」ことの内実がいよいよ稀薄化し、空洞化し、「知識」偏重の度合いがますます進行する現代社会の姿である。

この両者——生の稀薄化と知識偏重——は相互作用の関係にある。

現代社会は膨大な知識・情報の上に成り立っている。

一方で、「生きる」ということの根本感覚が失われようとしている。少なくとも、そこに大きな質的变化が起りつつある。この趨勢が人間をどこへ導いてゆくのかは判らない。だが、この生の根本感覚の喪失は、根本的な「知」のあり方が今日失われつつあるという事実と深く係わっている。

この嗤われている男の内部にあふれる、主体的に「知る」ことの深い悦び、これを、いま、われわれはとり戻すべきではないか。内的、主体的な生と分離してしまつた「知識」のあり方に根本的な反省を加えるべきではないか。そして今一度、「生きる」と「知る」とを一元化すべきなのではないか。

その一元化へ向けての方途のひとつは、主体的なコトバの復権にある。「生きる」と「知る」とを繁げ、それらの基盤となる主体的なコトバを、各人が自ら獲得することにある。

再三われわれのみて来たとおり、人間にあっては、「生きる」「知る」「コトバ」の三者は相互に分ちがたく結びついている。「生きる」とは「コトバを生きる」

にほぼ等しい。「知る」とは「コトバを知る」とほとんど同義である。(言うまでもなく、自ら主体的に、真の応答を繰り広げた果てに獲得したコトバ、これを生き、これを知る、の意である。)

モノ・コト・ヒトそれぞれの世界に真の応答をし、真の責任を担うことが「生きる」ことであり、「知る」ことである。

コトバは実在世界への入り口であり、同時に、その使用者にとつての世界そのものである。知識といい、学問といい、それはモノ・コトの展開する世界をコトバにより検証する作業であり、モノ・コトとコトバとの対応関係を検証することに他ならない。この学問・知識なるものを、いま一度、言葉を生き、言葉の中に生きる人間が、内発的に、主体的に発する問いかけ、そして、知る悦び、へとひき戻すことが必要だろう。英語の science ドイツ語の Wissenschaft は、ともにその語根に日常語の「知る」(sahé, wissen) を留めている。いま一度ここへ戻ることが必要だろう。序でに、英語の school がギリシヤ語の skhólé (閑暇, leisure) に由来することは周知

のことだが、いま一度ここへ眼を向けることも無駄なことではない。

#### 四 遊びの復権

最後に、シラーの有名な言葉に触れて結びとしたい。

Man only plays when in the full meaning of the word he is a man, and he is completely a man when he plays. (Schiller)

一読してなるほどと思わせる。だが、考え出すと恐しく難しい文言である。

「その言葉(人間)の十全な意味で、人間であるとき……」——ここでわれわれは「人間」をその全側面から考えることを求められる。また、「……そのときのみ人間は遊ぶ。そして遊ぶとき人間は全き人間である」——ここで「遊び」の本質を問うことが求められる。

「人間」「遊び」ともにその意味を考え出すときりが無いが、ここでは、本稿で今までみてきたこととの係わりにおいて考えよう。

「遊び」とは何だろう。この言葉によってすぐに人が思い浮べるのは、遊びのもつ楽しさ、面白さ、喜びである。そして、それらが何らかのかたちとなって表われる姿であろう。遊戯、ゲーム、うた、踊り、躍り、みなかたちの表われである。砂場で遊ぶ子供は砂でかたちを作り、遊ぶ。積み木を前にして子供は何かのかたちを作って遊ぶ。仲間と遊ぶときはゲームのルールを決め、ゲームのかたちを求める。ルールが破られ、かたちが崩れるとき、遊びは消える。

このように、「遊び」は愉悦という心的現象とかたちへの志向との上に成り立ち、両者の融合した同時的発現が「遊び」である。また、両者は互に作用しあい、その作用密度が高まれば高まるほど遊びの密度、質、ともに高まる。遊びが真剣になるのである。(日常語では、ときにこの二つの言葉が対立概念として使われるが、本質的には、右にみるとおり、これは対立概念ではない。)

ここで、「遊び」という現象に含まれる特徴点を、本稿の論旨にひきつけて、まとめてみよう。

一 「遊び」の出発点は、モノ・コト・ヒトに対する 'real responding' にある。(主体的な自我——あるいは

人格と言ひ換えてもよい——が他の個と出会い、選びとり、両者の間に関係の場が生れるのである。)

二 そして遊びの進展とともに、主体としての個、対象としての個、この両者は融合一如となる。(夢中になる「我を忘れる」という表現はこれを指す。)

三 「遊び」の中に流れるのは、主体的な生きられる時間である。(遊びに夢中になっている子供は物理的時間の外にいる。物理的時間を意識させられるときはそれを拒む。もちろん遊びの世界には、積極的に時間のワクを設けるケースも多々あるが、これは遊びの一要素としての緊張を意図的に設けるかたちの一つである。)

四 「遊び」は自由な自己活動である。(遊びは自発性の上に成り立つ。強制される遊びはもはや遊びではない。また、無心に遊ぶ子供は他者の参加を喜んで、介入は拒む。更に、遊びは合目的活動ではない。出発点において何らかの目標設定がなされても、遊び自体には目的性はない。)

五 最後に、「遊び」は、右の諸点にかたちを与え、あるいは、右の諸点がかたちと成るところに成立する。

このようにみけると、遊びを人間の全一的な発露として捉え、逆に、その全一的発露をまって始めて人間は遊ぶ、というシラーの言葉の意味もかなり明瞭になる。

いささか子供の遊びに眼が向きすぎたかも知れないが、以上の視点は、芸術・学問の世界にも当てはまる。

芸術は、造型芸術のみならず、文学、音楽等々すべて、かたちを求める人間の、精神活動のひとつの典型である。その創造においても、享受においても、個と個の出会いに始まり、かたちにおいて成就する。知・情・意すべてを含む人間の全一的発露の場である。

かたちは異るとは言え、学問の世界にもこれは当てはまる。学問、芸術ともに、その本質において、もっとも高い「遊び」の世界である、と言えぬだらうか。

(補註1) 本稿に引用したフョーリズムは『The Faber Book of Aphorisms, ed. W. H. Auden & L. Kronenberger, Faber & Faber Ltd, 1962』に拠る。フョーリズムは文脈

時代、場所等を越えてその文言の真が成り立つ、という観点に立って、本論中では個々の典拠を示さなかったが、参考までに、シラーのそれは『人間の美的教育について』第十五書簡に、ブーバーのそれは『対話』(Wissenspahe)中の「責任」(Verantwortung)の項にそれぞれみえる。ニイチェ、ゲールモンの典拠は未詳。

(補註2) 本稿で「人格」というとき、それは必ずしも倫理的意味合い——道徳的行為の主体としての個人——を持たない。簡単に言えば「個としての人間たる存在」をいう。「個」の中にすでに「格」の概念が入るが、肉体的存在には「体格」「骨格」があり、モノには「規格」「品格」があり、社会生活には「資格」「破格」等々があるように、一人の人をその人たらしめているワク組みあるいは核となるもの、を指して「人格」という。コトバの獲得、コトバの使用を通しての応答・責任、ともに、右に言う意味での「人格」形成過程の最重要項目であると私は考える。そして、外国語を学ぶことの最も重要な意味の一つがここにあると考える。

(一橋大学教授)